

# 生産年齢人口が成長の必要条件 投資を伴えば潜在力は大きい

BRICsが新興国を代表するという時代は過去となりつつある。人口に着目すれば新たな成長国の台頭がみえてくる。

**日** 本もかつては新興国だった。現在、新興国として括られている国々のなかにも、いずれ先進国と呼ばれる国が出てこよう。その成否を決めるのは、各国の成長力がどれだけ所得水準を引き上げるかだ。アジアでは日本に始まり、新興工業国・地域（NIEs）、東南アジア諸国連合（ASEAN）、中国と経済成長の連鎖が続いてきた。

この理由は、先行国、例えば日本における賃金などの上昇が、当該国の新陳代謝と近隣諸国への産業移転を引き起こすといった観点から説明されることが多い。これは確かに重要なポイントだが、その背後には人口の年齢構成の変化が存在していた可能性が高い。

それを示すのが図1である。ここでは、将来予想を含むアジア諸国の生産年齢（15〜64歳）人口の総人口に対する割合を示しているが、各国の同比率の上昇時期が、高度成長の連鎖に対応しているのだ。

そしてタイ、中国が韓国に続き、両国ともに2010年前後に同比率のピークを迎える。一方、10年時点のインドネシアはまだ伸びしろを残している。インドはさらに遅れており、現在、同比率は上昇のさなかにある。またベトナムは対米競争の影響などから、生産年齢人口比率の上昇のスタート台が低く、それだけ近年までの上昇ペースが速かった。経済成長を達成した順序が、人口構成の変化にほぼ即していることが確認できる。

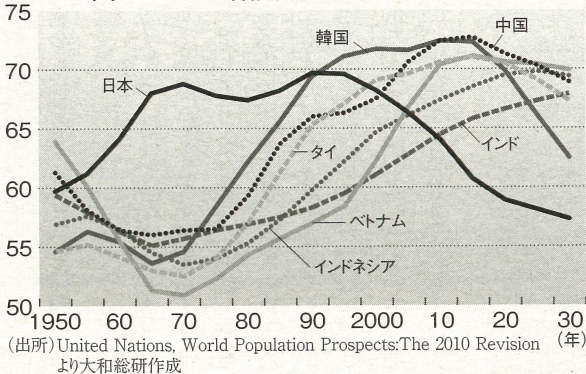
られ、消費需要が拡大する。一方、世帯数の増加、都市化は都市部の住宅需要とともに耐久財需要を急増させる。こうして、労働投入量の増加という供給サイドの変化が需要の増加を伴い、高度成長を実現した。

## 成長モデルは中国

以上の議論は「人口」という要素が、アジアにとどまらず今後の潜在的な高成長国を見極める際の手がかりになることを示唆している。そこでアジア以外の主要新興国について、生産年齢人口のトレンドを確認しよう（図2）。

まず目につくのは、ポーランド、ルーマニア、ロシアといった欧州の新興国が人口構成的に成熟しており、既に生産年齢人口比率がピークアウトしていることだ。同比率の上昇局面では各国の平均年齢も上昇するのが普通である。しかし、日本にみられるように、人口構成が成熟化するに従って生産年齢人口は頭打

図1 アジア諸国の生産年齢人口比率



ち、低下に転じる一方、平均年齢のみが上昇を続ける局面がいずれやってくる。これが少子高齢化である。そして、この過程で人口の絶対数の伸びも鈍化し、やがて減少し始める。こうなると、人口そのものが成長を後押しすることは望めない。これは先進国共通の悩みの種といつてよいが、欧州の新興国も同様の問題に直面している。

そらく投資だろう。近年の新興国の高度成長のなかでも、飛び抜けた成功を体現したのが中国である。結果としてみれば、中国の成長を牽引してきたのは投資と輸出である。輸出が増えるには生産能力の拡充が必要であり、投資拡大の持続性が中国の高度成長の基礎であった。そして、同国の投資に外国企業の直接投資が多大な貢献を果たしてきたことは周知のとおりだ。

一方、投資主体である外国企業からみると、高度成長初期の中国は生産・輸出拠点という位置づけが主流だった。同国の最大の魅力は安くて豊富な（若年）労働力にあったわけだ。しかし、生産拠点として産業集積が進むなか、人々の所得水準も上昇し、中国は市場としても発展した。投資主体にとっては生産能力を拡充させる誘因が増え、これが同国の長期にわたる投資主導型の高度成長につながった。

中国の成功体験は、今後も投資主体の意思決定に影響を及ぼし続けることになる。投資の受け入れ国としての理想形は、安価な賃金、豊富な若年人口、高い人口成長率によって、生産拠点から市場へのステップアップが期待できる国となる。このような観点から、図1、2で取り上げた国から、生産年齢人口比率がすでにピークアウトした国を除く8カ

国についてまとめれば、表のようになる。

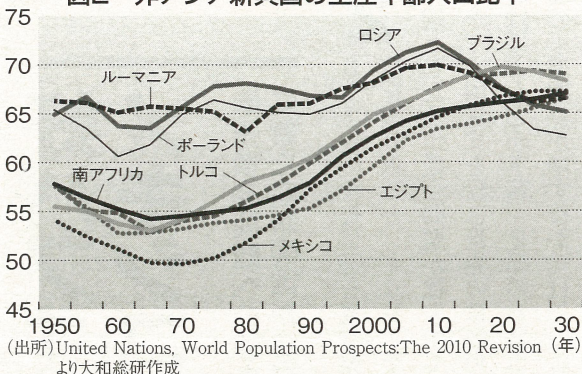
## BRICsに追随する国々

いずれの国も相応の潜在成長力を持つているが、人口構成・規模的に圧倒的な優位を誇っているのはインドだ。だが、中位年齢の低さは所得水準の低さの裏返しという側面を持つていることにも注意が必要だ。発射台が低いだけに、大きな伸びしろを持つているのは当たり前という意味である。

また、南アフリカは、経済的・社会的インフラが整備されており、アフリカビジネスの玄関口となることで、人口規模だけにとどまらない潜在力を秘めている可能性もある。

一方、エジプトは人口の豊富さと若さが両立し、数字上のポテンシャルは絶大だが、同国を含む中東・北アフリカ諸国はそうした若年人口を吸収する雇用機会が不足しており、それが昨年来の民主化を求める混乱につながっている。人口構成と規模は成長の必要条件

図2 非アジア新興国の生産年齢人口比率



(出所) United Nations, World Population Prospects: The 2010 Revision (年より大和総研作成)

新興国の人口絶対数と中位年齢

	インド	インドネシア	ベトナム	ブラジル	メキシコ	南アフリカ	トルコ	エジプト
人口(百万人)	1190.5	237.6	88.3	193.3	108.6	50.0	71.3	77.8
中位年齢(歳)	25.1	27.8	28.2	29.1	26.6	24.9	28.3	24.4

(出所) IMF、国連

トルコは欧州の新興国の例外と言つてよい。人口構成は若く、生産年齢人口比率は上昇している。これは人口の絶対数が比較的速いスピードで増加することを意味しており、欧州での潜在成長力は際立っている。これまで長くBRICsが新興国の代表格として位置づけられてきたが、人口構成に着目して将来を展望すれば、中国やロシア以上に伸びしろの豊富な国が少なくない。

こだま たかし  
児玉 卓  
(大和総研ロンドンリサーチセンター長)